

Wish
upon
a
Star

20030707

MEIKO Matsumoto

電車の窓から海が見える。

晴れてさえいれば、まるで見る人を手招きするかのように明るくい水飛沫をきらきらと躍らせているその海は、今日は灰色の雨雲の下、その雲の色をそのまま映したグレー。降りしきる雨がざわめく灰色の絨毯に白い模様をランダムに残していく。

そのことが、ただでさえ憂鬱な気分になっていたひとみをさらに滅入らせた。

今日は、七夕なのにな。

ふと、ため息をつく。

七夕の前の晩にってる坊主を作ったなんて、何年ぶりのことだろう。

ちり紙を丸めて作ったてる坊主は、きつと今ごろ部屋の軒下で雨に濡れて、見るも無残な姿をさらしているのにちがいない。

「…あーあ」

一年にたった一度の逢瀬くらい、かなえてあげてもいいと思っ。

雨くらいで負けちゃうなんて、天の河を渡る白鳥は情けなさすぎるんじゃないだろうか。

…確かに、雨の日に飛ぶ鳥なんて、めったに見ないけれど。

ひとみがもう一度ため息をついたところで、電車は終点についた。ここから電車をJRに乗り換えて、予備校のあるターミナル駅まで行かなくてはならない。

JRの駅まではアーケードの商店街なので、雨に濡れずに済む。

商店街のいくつかの店先には背の高い竹が結わえ付けられ、さらさらとその葉を鳴らしていた。そして色とりどりの短冊にはそれぞれに願いごと。笹の下で買い物客相手に短冊のサービスを行っているのだった。買い物袋を提げた母親の横で、子供たちが熱心に願いごとを書いていた。

大きくなったらパイロットになりたい。

さかあがりができるようになりたい。

テストでいい点がとれますように。

ささやかで、でも、必死の願いごと。

…でも、この雨じゃ、願いごとも届かないのかもしれない。

少しふてくされた気分で、そんな意地悪なことを思いながらその前を通り過ぎようとしたら、たまたま店のお兄さんと目が合った。どこかで見たことあるような…？とひとみが一瞬立ち止まる。お兄さんはにっこり笑って、

「ほら、きみも書いていきなさい。願いごと、あるでしょっ。」

と言って、水色の短冊とサインペンを差し出してきた。

意外な展開に、ついそれらを受け取ってしまったから、ひとみははたと考え込んでしまった。

願いごと。

あたしの、願うこと。

あたしが、望むこと。

星に願えば、かなうのかしら。

でも、今日は雨。星は雲の向こう。

願いは、届くのかしら？

そこまで考えて、ひとみははっとした。

星に願いをかけることすら恐れている。かなわなかったら、と思うほどにおびえている。

たった一つの願いをかけることに。

会いたい、と。

もう一度だけでもいいから、と。

ひとみの目からぼろりと涙がこぼれた。

ああ…あたし、こんなにも焦がれている

あいたい、あいたい、あいたい。

あなたに、会いたい。

「ねえ、雨が降ってても、お星さまに届くの？」

隣で一生懸命短冊に願いごとを書いていた子供が母親に尋ねた。聞かれた母親は困ったように首をかしげる。

すると、短冊を配っていたお兄さんがぼんぼんと子供の頭をたたきながら言った。

「聞いたことはないかい？ 雨の日でも、その雲の上はずーっと星の世界が広がってるんだ。今日だって、みんなに見えないだけで、お星さまはちゃ

んとそこにいるんだよ。だから大丈夫、坊やの願いごととちゃんと届くさ」
 その言葉を聞いて、子供は「ほんと!？」と満面の笑みを浮かべると、持
 っていた短冊をお兄さんに渡した。お兄さんは器用な手つきで笹の葉に短
 冊をくりつけていく。手を離すと、枝が大きくしななって空を切った。頭
 上から笹の葉がさらさら、さらさらと音を降らす。

それを見上げながら、ひとみは、お兄さんの言葉を繰り返した。

見えなくても、お星さまは、ちゃんとそこにいる。
 見えなくても。

想いは、必ずここにある。

忘れぬ。なくさない。ずっと、ここに。

あたしの中に。

「さあ、きみの短冊は？」

優しい笑みを浮かべたお兄さんがひとみの方へ手を差し出す。

…そうだ、瞳が、フォルケンさんにちよつと似てるんだ…

いつか出会った優しい人の面影に思いをはせながら、ひとみはあわてて
 涙をぬぐった。

「今書きます。ちよつと待ってくださいね」

もうすぐ日付が変わろうという頃には雨がおさまったが、灰色の雲は今
 も切れぎれに空を埋めていた。

軒先からずぶ濡れのとてる坊主をはずしたひとみは、ちよつと明るい
 気持ちでその空を見上げた。

「あなたがいつも笑顔でありますように」

短冊に記したその願いは、きつと雲をつきぬけ星の光に乗って、きつと
 届くに違いない。

あたしの中の星が、きつと届けてくれるに違いない。

風に流れた雲の合間に、ちかりと星が見えた。

星の河を渡る白鳥の光ならいいな。

そう思いながら、ひとみは雨あがりの初夏の空気を胸いっぱい吸い込
 んだ。